様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２８日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：新学術領域研究
研究期間：2008～2012
課題番号：２０１０１００１
研究課題名（和文）　『ユーラシア地域大国の比較研究』に関する総括

研究課題名（英文）　General Overview of "Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia"

研究代表者
田畑　伸一郎（TABATA SHINICHIRO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：10183071

研究成果の概要（和文）：
本研究は，中国，ロシア，インドに代表されるユーラシアの地域大国を総合的，学際的に比較することにより，これら地域大国が人口・面積・資源などの面での優位性を活かせる体制を築いて，地域大国として台頭してきた諸相を明らかにした。他方，地域大国が，民族・宗教・言語・文化などの多様性のなかで，国家統合，政治改革，格差是正，環境保護をはじめとする多くの共通の課題を抱え，世界全体にも大きな影響を与えながら，それに対処している諸相を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This project revealed various aspects of the process in which regional powers in Eurasia, such as China, Russia and India, have emerged as they are at present, through comprehensive and multi-disciplinary comparative study of these countries. Each country has developed, taking advantage of the largeness of population, territorial land and the richness of resources. In addition, it was demonstrated through this project that these regional powers with diverse nations, religions, languages and cultures, have a number of common problems, such as national integration, political reforms, reduction in economic disparities and environmental protection. Each regional power is taking measures against these challenges, which exerts considerable influence on the entire world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	10,800,000	3,240,000	14,040,000
２００９年度	17,600,000	5,280,000	22,880,000
２０１０年度	18,300,000	5,490,000	23,790,000
２０１１年度	18,300,000	5,490,000	23,790,000
２０１２年度	19,100,000	5,730,000	24,830,000
総　計	84,100,000	25,230,000	109,330,000

研究分野：総合人文社会
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：世界システム　ロシア　中国　インド　帝国論

１．研究開始当初の背景

冷戦後の世界を席巻したアメリカ一極支配論が衰退するなかで，欧米主導の世界秩序への挑戦者として台頭してきた中国，ロシア，インドなどの地域大国について，それぞれの国の専門家を動員する形で，初めての本格的な比較研究を組織した。

ロシア（スラブ・ユーラシア），中国，イ

ンド（南アジア）などの個々の地域については, 1990 年代に重点領域研究（特定領域研究）の形で総合的研究が行われ，日本におけるこれら地域を対象とする地域研究が劇的に発展し，世界的にも注目される研究が数多く生まれた。その際，これらの個々の地域について全国的に共同研究を行う体制も構築された。本研究は，このような個々の地域の地域研究を束ねるものと位置付けられた。中国研究，ロシア研究，インド研究といった研究コミュニティについては，その固有性の強さ，言い換えれば壁の高さから，このような比較研究は，必要性が以前から認識されながら，なかなか実現されずにいたが，本研究は，このような壁を打破して，様々な地域研究をつなぐ役割を果たすことになった。

２．研究の目的

本領域研究では，国際関係，政治，経済，歴史，社会，文化を含む社会科学・人文科学の諸分野からロシア，中国，インドなどのユーラシアの地域大国を総合的，学際的に比較する研究体制を取っている。ユーラシアの地域大国が地域大国として発展・定着できる条件は何であるのか，また，それを妨げるような不安定要因は何であるのかという視点から比較を行い，各地域大国の特殊性，固有性の理解を深めることが第１の目的である。第２に，地域大国としての共通性を抽出することにより，地域大国が現代世界を主導する中軸国（米国，EU，日本など）に代わる何らかの新しいモデルを提示しているのかを検討する。第３に，世界システムを意識して行うこのような比較に基づき，世界システムのなかに地域大国を位置付けることが目的である。

３．研究の方法

総合的，学際的な比較を行うために，国際関係，政治，経済，歴史，社会，文化における比較を行う６つの計画研究を組織した。１つの計画研究のなかに，異なる地域研究コミュニティの研究者を配置し，専門外の地域の研究者との共同研究を遂行した。基本的な研究手法は，文献調査と現地調査であり，共同の現地調査なども行った。１人の研究者が複数の国を比較するような研究を奨励し，実際に多くの分担者によって実現された。

個々の研究においては，地域大国の間に何らかの共通性を見出すことを意識的に行った。また，共通性や違いの原因について，歴史的な観点，学際的な観点から分析することを重視した。

４．研究成果

(1)本研究は，中国，ロシア，インドに代表されるユーラシアの地域大国の比較が，これら諸国についての理解を深めることはもとより，近現代世界の国際関係，政治，経済，歴史，社会，文化をより深く理解するための切り口の１つとして有効であることを示した。

(2)具体的には，国家統合，政治改革，格差是正，エネルギー安全保障，環境保護といった，これらの国が持つ課題の類似性と多様性，および課題への対応の共通性と違いを分析した。また，中国，ロシア，インドが，欧米や日本（いわゆる西側）が作ってきた世界秩序の受益者であると同時にそれへの挑戦者であるという視点から，世界システムのなかでのこれらの国の位置付けを検討した。その際，短期的な現象のみに着目するのではなく，中国，ロシア，インドの帝国あるいは植民地としての過去をはじめとする歴史的・文化的背景や，中長期的な変化を重視した。

(3)これら地域大国台頭の契機となった経済面での台頭については，本研究において，中国，ロシア，インドの３国が冷戦終了とソ連崩壊の後に，こぞって対外開放・経済自由化に乗り出したことによってそれが準備されたこと，このプロセスは数世紀間の経済的な遅れを取り戻すための上からの近代化の様相を呈したこと，これら３国が人口・面積・資源の面での大国の優位を活かす形で高度経済成長を実現したこと，現在でも国家による経済への大きな関与という共通性が見られることなどを明らかにした。そして，これらの共通性の結果として，地域大国が外貨準備を蓄積し，再生ブレトンウッズ体制と呼ばれる国際金融構造の一端を担うようになっていった過程を解明した。

(4)このような上からの近代化に関連して，政治体制，支配政党，地方統治，民族政策などについての比較研究を行った。このうち，支配政党については，広大な領土と多様な民族的，地域的，宗教的，言語的集団を有し，社会構造の変容，急速な経済成長のもとにある地域大国にとって有利な仕組みであると理解したうえで，中国，ロシア，インドの支配政党のあり方の違いを明らかにし，支配政党の中央集権化がもたらした影響にも違いが生じていることを明らかにした。

地方の経済発展や福祉を担う地方統治に関しては，中国，インド，ロシアの間で大きな違いがあることも明らかにし，その違いが地域の社会構造や競争選挙の存否によってかなりの程度説明できることも明らかにした。

(5)ロシア，中国，インドのユーラシアにおける位置付けについては，冷戦がこの３国をユーラシアの自立的な主役に押し上げていく準備期間となったことを明らかにし，現在は，この３国が同盟を結ばず，かつ同時に台頭する形になっているという理解を示した。基本的には，この３国ともに，多極型の世界秩序

を目指していることになる。
(6)地域大国が地域大国たる所以は，周辺地域との関係や他の中小規模の国々の存在を抜きにしては理解できないため，トルコやサウジアラビア，イランといったミドルパワーや，周辺の小国・地域にも注目して分析を行った。さらに，中国，ロシア，インドの台頭には，それぞれが巨大な面積を占め，多くの地域と接するという地理的な要因も大きいことから，空間的アプローチによる分析を行った。その際，それぞれの国を閉じた空間として扱うのではなく，越境的な人の動きや，様々な国・地域の相互認識・表象を重視した。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 150 件）
①長縄宣博「近代帝国の統治とイスラームの相互連関：ロシア帝国の場合」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会，査読無，2013，pp. 158-184.
②Tabata Shinichiro, "The Booming Russo-Japanese Economic Relations: Causes and Prospects," *Eurasian Geography and Economics*, 査読有, Vol. 53, No. 4, 2012, pp. 422-441.
③岩下明裕「グローバル・ユーラシア：新しい地政学の創造」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界５　国家と国際関係』東京大学出版会，査読無，2012, pp. 43-65.
④長縄宣博「総力戦のなかのムスリム社会と公共圏：20 世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域を中心に」塩川伸明・小松久男・沼野充義・松井康浩編『ユーラシア世界４　公共圏と親密圏』東京大学出版会，査読無，2012，pp. 71-96.
⑤宇山智彦「ロシア帝国論」ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』彩流社, 査読無, 2012, pp. 165-179.
⑥Naganawa Norihiro, “The Hajj Making Geopolitics, Empire, and Local Politics: A View from the Volga-Ural Region at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries,” in Alexandre Papas, Thomas Welsford, and Thierry Zarcone, eds., *Central Asian Pilgrims: Hajj Routes and Pious Visits between Central Asia and the Hijaz*. Berlin: Klaus Schwarz Verlag, 査読無，2012, pp. 168-198.
⑦山根聡「アフガニスタン：ソ連軍侵攻から 9.11 へ，そしてその後」帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編『朝倉世界地理講座：大地と人間の物語５　中央アジア』朝倉書店，査読無，2012, pp. 274-285.
⑧Tabata Shinichiro, “Growth in the International Reserves of Russia, China, and India: A Comparison of Underlying Mechanisms,” *Eurasian Geography and Economics*, 査読有, Vol. 52, No. 3, 2011, pp. 409-427.
⑨Uegaki Akira, “Development in Global Economy: China since Deng Xiaoping and Russia since Gorbachev,” 『西南学院大学経済学論集』査読無，46 巻 1・2 合併号，2011，pp. 99-121.
⑩Naganawa Norihiro, “Holidays in Kazan: The Public Sphere and the Politics of Religious Authority among Tatars in 1914,” *Slavic Review*, 査読有, Vol. 71, 2011, pp. 25-48.
⑪田畑伸一郎・上垣彰「現代の国際金融構造におけるロシア，中国，インド」『比較経済研究』査読有，48 巻 1 号，2011, pp. 15-26.
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_03/achievements/files/201101_uegaki_tabata.pdf
⑫唐亮「現代化的政治経済学和中国模式的有効性評価」『馬克思主義与現実』査読有，113 巻，2011, pp. 175-182.
⑬望月哲男「19 世紀ロシア文学のヴォルガ表象：アポロン・グリゴーリエフ『ヴォルガをさかのぼって』を中心に」『境界研究』査読有，No. 2，2011，pp. 65-83.
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/japan_border_review/no2/03_mochizuki.pdf
⑭Matsuzato Kimitaka and Sawae Fumiko, “Rebuilding a Confessional State: Islamic Ecclesiology in Turkey, Russia and China,” *Religion, State and Society*, 査読有, Vol. 38, No. 4, 2010, pp. 331-360.
⑮Matsuzato Kimitaka, “Cultural Geopolitics and the New Border Regions of Eurasia,” *Journal of Eurasian Studies*, 査読有，Vol. 1, No. 1, 2010, pp. 42-53.
http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1879366509000062
⑯Tabata Shinichiro, “The Influence of High Oil Prices on the Russian Economy: A Comparison with Saudi Arabia,” *Eurasian Geography and Economics*, 査読有, Vol. 50, No. 1, 2009, pp. 75-92.
⑰上垣彰「比較の意義について：経済学の立場から」『比較経済研究』査読有，46 巻 1 号，2009, pp. 35-51.

〔学会発表〕（計 121 件）
①Naganawa Norihiro, “Toward a Seaborne Empire? Bolsheviks in the Arabian Peninsula, 1924-1938,” 44th Annual Convention of Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies, November 16, 2012, New Orleans Marriott, New Orleans, U.S.A.
②山根聡「国家とウンマのすり合わせ―パキスタンとアフガニスタンをめぐるムスリムの議論―」アジア政経学会，2012 年 10 月 13 日，関西学院大学，大阪。
③Uegaki Akira, “Russia and China in Global

Imbalance: Analysis in Open-Macro Framework," 12th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies, September 7, 2012, Paisley, University of the West of Scotland, Scotland.
④Tabata Shinichiro, "Comparison of the Mechanism of Foreign Reserve Accumulation in Russia, China and India," Joint Conference by the Association for Comparative Economic Studies (ACES), the Japanese Association for Comparative Economic Studies (JACES) and the Society for the Study of Emerging Markets (SSEM), May 17, 2012, Ala Moana Hotel, Honolulu, Hawaii, U.S.A.
⑤Uegaki Akira, "Acceptance of Liberal Thought in the Course of Economic Transformation: Comparative Analysis of Russia and China," 43rd Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, November 20, 2011, Omni Shoreham, Washington DC., U.S.A.
⑥Naganawa Norihiro, "A Mirror of Imperialism? Muslim Mediators for the Russian Empire and USSR in Arabia, 1890s-1930s," November 19, 2010, 42nd annual convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, Westin Bonaventure, Los Angeles, U.S.A.
⑦宇山智彦「グレートゲーム再考：中央アジアにとっての帝国間競争の意味」国際政治学会 2010 年度研究大会，2010 年 10 月 29 日，札幌コンベンションセンター，札幌。
⑧Tabata Shinichiro, "Common Features of the Russian Economy with China and India," 11th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies, August 27, 2010, University of Tartu, Tartu, Estonia.
⑨Tabata Shinichiro, "Russia's Economic Growth Model in Comparison with China and India," International Council for Central and East European Studies VIII World Congress, July 28, 2010, Stockholm City Conference Center, Stockholm.
⑩田畑伸一郎・上垣彰「ロシア，中国，インドの経済発展モデルの比較」比較経済体制学会全国大会, 2010 年 6 月 5 日, 大阪市立大学, 大阪。
⑪Uyama Tomohiko, Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies," First Congress of the Asian Association of World Historians, May 31, 2009, 大阪大学中之島センター, 大阪。

〔図書〕（計 28 件）
①上垣彰・田畑伸一郎編著『シリーズ・ユーラシア地域大国論１　ユーラシア地域大国の持続的経済発展』ミネルヴァ書房，2013，全 254 頁。
②唐亮・松里公孝編著『シリーズ・ユーラシア地域大国論２　ユーラシア地域大国の統治モデル』ミネルヴァ書房, 2013, 全 313 頁。
③唐亮『現代中国の政治：「開発独裁」とそのゆくえ』岩波書店，2012，全 252 頁。
④塩川伸明・小松久男・沼野充義・宇山智彦編『ユーラシア世界１〈東〉と〈西〉』東京大学出版会，2012, 全 265 頁。
⑤Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, London: Routledge, 2011, 全 253 頁。
⑥山根聡『４億の少数派：南アジアのイスラーム』山川出版社，2011，全 114 頁。

〔その他〕
ホームページ等
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
田畑　伸一郎（TABATA SHINICHIRO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：10183071

(2)研究分担者
唐　亮（TANG LIANG）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：10257743
岩下　明裕（IWASHITA AKIHIRO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：20243876
宇山　智彦（UYAMA TOMOHIKO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：40281852
上垣　彰（UEGAKI AKIRA）
西南学院大学・経済学部・教授
研究者番号：70176577
山根　聡（YAMANE SO）
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号：80283836
望月　哲男（MOCHIZUKI TETSUO）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：90166330
松里　公孝（MATSUZATO KIMITAKA）
北海道大学・スラブ研究センター・教授
研究者番号：20240640
長縄　宣博（NAGANAWA NORIHIRO）
北海道大学・スラブ研究センター・准教授
研究者番号：30451389